モーリャックにおけるengagementと創作活動に関する一考察

柏　原　紀久子

Mauriac は「私は journalisme を真面目にとっている。それは私にとって littérature engagée の表現にふさわしい唯一のジャンルである。」[(1)] とのべているように，journalisme を参加せる文学者の唯一の行動の手段として，新聞雑誌上で非常に精力的な論評活動を展開し，愚劣さと不正で満ちていた当時の政界を鋭く批判しヒューマニズム確立のために社会的に大きな貢献を果した。彼の文学者としてのペンの冴えはすばらしく，しばしば論敵を射ぬくその手ごたえに「こういった文章が作家に与える楽しさは信じられぬくらいのものである。しかし標的は生きているのだ。キリスト教徒よ，あなたの立場は正しいだろうか」[(2)] と彼自身自戒するほどのものであり，彼のジャーナリスム活動がいかに行動として大胆なものであったかは彼自身の次の述懐の中によく表わされている。「論敵からさへ感心される大評判のジャーナリスト―余りの評判に本人が自ら任じている小説家の方が嫉妬を覚えるほどであった。本能的に危険を冒すことを嫌うこのブルジョワは，それにもかゝわらず，彼の仲間たちの誰もが殆んどなし得なかったほどの大胆さをペンを片手に発揮したのである。」[(3)] このようにMauriac は文学者としての能力を最大限に生かしきって engager したのである。ところでMauriac は，彼のこうした行動ぶりにむけられた「そんなにあがいて行動しても一体何になるのか。何故あなたは物語を創作したり語ったりすることに専心しないのか。それがあなたの職業だったではないか。」[(4)] という皮肉や「私は engager している。それも engagement（兵役志願）に署名した兵隊と同じように，この言葉の形而下的な意味においてである。……もしあのなつかしいシャルル・ボスが彼のいるあの世から私のふる舞いを観察するとしたら，超俗のなかでのみしか生きていなかった彼のことだから，きっと私のこの行為を軽蔑するにちがいない。」[(5)] という彼自身の自嘲めいた言葉からもうかがえるように，彼は完全に形而下的世界に没入してしまい，1954年に *L'Agneau* を著わしたのを最後に，創作活動を殆んど放棄してしまっている。要するに彼は彼のすべてをもって engager したということである。文学者としての能力をすべてそれに注いだのであるから，彼のペンは鋭く，冴えわたっていたのも当然だといえる。ところで彼は何故創作活動を放棄してしまったのであろうか。正義への彼のかつえがいかに大きかったとはいえ，行動と創作との両立は可能の筈であり，事実 engager した作家達の多くが創作活動に

対して特にその態度に変化を見せていないことを思うとき，彼が敢えて創作を放棄したことは注目すべきことであり，当然そこに何らかの意味があり，それが彼の engagement に独自な意義を与えているように思われる。ところが従来モーリャックの創作活動の放棄は，執筆のための時間的な問題のためであるとか，或いは，「1930年代に入ってモーリャックの想像的能力が涸渇し始めた。」[6] という批評家達の指摘をこれにあてはめ，能力的な問題のせいであるというように，つまり彼の創作放棄はごく自然的なものであるとして受けとめられ，そこに特に意味があるとして考えられることは殆んど無かったように思われる。しかしモーリャック自身は，「私を小説からひき離しているのは私がジャーナリズムにさいている時間ではない。」[7] 「我々がジャーナリストになったのは，……創造力の減退のためだというのか。いや私はそうは思わない。私に関する限り私は書きたくなったとき *Le Sagoïn* を *Galigaï* を *L'Agneau* を書いた。きょうにでもその気になればもう一つの物語を始めることができよう。」[8] と彼の小説放棄は決して時間的能力的なものではないと否定し，更に「我々を引きとめているのは無能力ではなくてむしろ我々の内部にある，一体そんなことをして何になるというあの気持である。」[9] 「私が今，歴史それも現在作られつつある歴史に没頭しているのは，小説がもはや私をとらえることがなくなったからだ。」[10] とのべて彼の小説放棄は小説への関心喪失という重要な要因がそこに働いているものであることを明らかにし，彼の創作活動放棄は決してごく自然的なものとして見過ごされるべきことではなく，それは重要な意義を有しているものであることをうかゞわせている。そこで本論において，彼の創作観を詳細に分析してゆきながら創作活動とは結局モーリャックにとって何であったのかを明らかにして，彼が何故創作活動に興味を失わざるを得なかったのか，そのことは何を意味しているのかを考察して，それが彼の engagement にどのような意義をもたらせているのかを考えてみたい。つまり，文学を放棄したことによる彼の engagement の意義をここであらためて考えてみたいと思うのである。

さて，彼の小説のテーマは常に「砂漠の探求」[11] であって，決していやされることのない情念の砂漠の中で，求めれば求めるほど罪にまみれ，それでも尚求め続けていく痛ましい人間の姿がその小説世界でくり返し描かれているが，当時モーリャック自身は，キリスト教への信仰と，どうしても断ちきれぬ肉への執着との間にあって苦しい葛藤のさ中にあり，肉の情念のその余りもの強じんさに苦しい呻きを発していたことは *Souffrance et Bonheur du Chrêtien* の中で明らかである。ところでモーリャックは，苦しい葛藤のさ中に創作へとかりたてられた当時の心境を次の様に告白して作者と作品の関係を示唆している。「世間は自分の意志に反してクリスチャンである人々に吐気を催すのは当然だが世間は回避することもできず選択することもできぬ彼らのドラマを知らないからである。霊と肉の両方でもって一致しないけれど métaphysique のとりことなることができるこの哀れな人に自分を説明するチャンスが残っているとすればそれは作品である。」[12] 「文学の仕事にこの

迷える身体ごと身を投げ入れることしか残されていなかった。打ち破ることのできぬこのmonstreを説明し，rendre sensibleにすること。私の未来の作品が私の目に形をもっていた。」[13]つまり彼の小説世界のあの悲惨さは，当時のモーリャックの苦悩そのものが形をとったものであることが分る。要するに，モーリャックによれば作品と作者の関係は，「書くことは自己をさらけだすこと。この内的な天と地で新しい天と地を創造すること。即ち作家は作品に内在する。」[14]ということである。自己をさらけ出すといってもあくまでも内在するという意味においてであって例えば一人の醜怪な作中人物が決して作者そのものでないのは云うまでもない。「作中人物は我々の実像からそのまゝ形づくられたと主張するのは誤りであろう。何故ならそれらの人物は我々が排斥するもの，受け入れぬもの，つまり我々の残滓からつくられているのである。こういう種類の人物を創造する小説家には彼らと格斗するえもいえぬ楽しみがある。」[15]とのべ，モーリャックは小説創造過程の秘密の一端をうかゞわせているがいずれにせよ，モーリャックによれば作品の中には必ず作者が内在しているということであって，このことを彼は更に次のようにのべている。「もしすばらしい作品，すぐれた大作である作品なら，それが最も客観的な小説であってもその背後には作者によって体験されたこの様なドラマ，彼のデモンやスフィンクスとのこのような個人的な格斗が隠されている。しかし個人的なこのドラマが全く外部に現われていないのはそれはおそらくはまさしく作者の天分の成果であろう。フロベールの《ボヴァリー夫人，それは私自身だ》という有名な言葉はよく理解できる。」[16]ところでここに，芸術家にとってのartの問題が立ち現われていることが分る。つまり「フロベールの《ボヴァリー夫人は私自身だ》という言葉はよく理解できる。——たゞし，そのことに気付くには時間が必要だ。それほどこのような作品の作者は一見したところでは作品の中に殆んどとけこんでしまっている。それは*Mme Bovary*が傑作だからである。云いかえれば渾然一体となり，一つの全体としてそれを創造した者から離れた一つの世界として独立した作品だからである。我々の作品が不完全であるにつれてその裂け目からその憐れな作者の悩める魂がたちあらわれているのである。」[17]この様にモーリャックは，作者から離れ一つの独立した世界として自己を主張する作品ほど芸術作品として秀れたものであることを言明し，そのためにこそ芸術家にとってartの重要性があることを示唆しているが，こうして芸術家がartに何よりも専心して自己を作品に内在化させんと努めるのは，それは，作者自身が作品に露わに姿を見せれば見せるほど，作品は独断的一方的となって，観賞者の拒絶に会い，作品として成立し得ないからに他ならない。人に受け入れられてはじめて芸術作品としての価値が生じるのである。というのはそもそも芸術家が作品を世に問うのは，彼が孤独に耐え得ぬ人間だからであり，作品とは，人を呼ばんとする彼の叫びに他ならない。人を呼ぶことがなければそれは叫びとしての意味がないのは当然である。モーリャックは，このことを次のようにのべている。「何故あなたは書くのか？ この深い理由は，一人でいられない本能の中にあるように思う。作家は孤独に甘んじることのできぬ人間である。各々がひとつの

砂漠であり作品は砂漠の中での叫びである。海に投げられた一つのびん，たとえ一つの魂によってでも理解されたいということである。……すべての人間は一人でいることが苦しい。芸術家はこの苦しさが形をとったものなのだ。ボードレールは芸術家を灯台とよんだが正しくその通り，闇をてらしてできるだけ多くの兄弟達を魅きつける。」[18] この様に，モーリャックは，芸術家の制作本能を人間の実存的本性であるとし，作品を，彼の叫びにたとえて，芸術家が何よりも art に専心して，彼の叫びを効果的にせんとするものであることを我々に理解させてくれている。

ところで作者は，こうして art にすべてを賭けて作品を制作するものであることが分るが，ところがこうして自己のすべてを賭けて完成した作品を前にして作者は，それが「彼が実現しようと努めて遂に到達し得ないある作品の下書きにすぎぬことを発見して悩む」[19] のである。「すでに発表した自分の作品は彼らにとっておそらく彼らが永遠に書かないであろうところの未知の傑作の，多少とも興味ある手引きではあるが失敗した試作に見えるのである。」[20] かくして，芸術家が次々と作品に挑戦する動機が理解されるが，ここで留意すべきは数多くの彼の作品はすべて彼にとって試作にすぎないということであって，彼は結局のところただ一つの物語，一つの傑作だけを目差しているということである。彼にとって「物語というものは一つしかない。」[21] ということをここでとくに留意しておきたい。

さて，こうして芸術家はたゞ一つの傑作をめざしているものであることが理解されるが，ところでもし彼が傑作をものにしたと確信し得たとすれば，つまり，自己を作品中に完全に内在化し得たとしたら，それは彼が自己のすべてを把握し得たということを意味しているのではないだろうか。何故なら自己の完全な把握なくしては，自己の客体化はあり得ないからである。つまり自己を識らなくては自己を自己からきり離し，作品中に内在させることはできない。要するに彼は自己を完全に把握するまでは傑作を完成させることはできないということである。自己を把握し得ぬもどかしさに作品から作品へと悩める自己の姿を彷徨させるにすぎない。こうして彼は自己を把握し得るまで作品に挑戦してゆくことになる。要するに芸術家の制作意欲とは自己発見への意欲でもあるといえるのではないか。或いは又作品の制作過程は自己把握の過程でもあるといえる。ここに芸術創造とは作者にとって自己発見のための重要な営みであると云うことができるであろう。更に読者も又，作品に提示されている作者自身の真理を見出し自らにそれを当てはめることによって自己の真実を照らすことができる。この点においてこそ作家はその存在理由を見出すものであることをモーリャックは次のようにのべている。「大小説家の主人公は作者が何事も証拠だてようとも証明しようとしない時であってもある真理を蔵しておりそれは各々にとって必ずしも一様でないかもしれぬがそれを発見し自らに当てはめるのは我々各々の任務である。恐らくそれが我々の存在理由でありこの観念の創造という，我々の馬鹿げた妙な仕事を正当化するものであろう。」[22] こうしてモーリャックは文学がそれぞれの人間の真実をてらし出し，真理の探究に向かわしむるものであるとしてその意義を見出している。もっとも，文

学は人間の真実をすべて明かし得る筈はなく，現実の錯綜した複雑神秘な人間真実のすべてに迫るには文学は余りにも無力であることを認識し「われわれが知っている人間性の不確かさを真正に描写しているような小説は存在しない。」[23]と小説の限界ははっきり自覚しているがしかしそれでもやはり例えば彼自身の小説の例をとれば作者に内在するmonstreからうみだされた奇怪な人物は人間の不安に働きかけ人間の安穏を乱すことに成功し少くとも人間をめざませるという存在価値を有していることは確かであり,「それだけでもすでに相当なものである。」[24]とモーリャックは作家の存在価値を主張している。以上の様にモーリャックは,自己を顕示せんとする芸術家の内的欲求にもとづく創作活動に,厳としてその存在価値を認めていることは明らかであり彼自身それを天職として,それまで一切の参加を拒否してまで創作活動に没入してきたわけであるが,では一体何故小説を放棄するに至ったか創作活動の何が彼をして関心を失わしめたのであるか以下更に考察をすゝめてみたい。

さてモーリャックによれば作家は，一つの傑作をめざしているものの，結果的には習作を重ねているわけであるがところでこの場合，遂に目ざす傑作を完成するということは当然あり得ることである。その時彼は，自己のすべてを読者に完全に引き渡し得たということでありもはや更に引き渡すべき何ものも残っていないということになる。一度び自己を引き渡して後尚語るべき何があろうか。つまりここに至って彼にはもはや作家である必要性は消滅したということになるのではないだろうか。もはや沈黙あるのみである。かくてモーリャックはラシーヌやランボーの沈黙は当然あり得べきものとし，逆に文学者は常に語り続けるものであるとする固定観念こそ不合理であるとして次の様にのべている。「*Phèdre*の後のラシーヌの沈黙，突如として別人になり自分の前で*Bateau ivre*の詩人の話をもちだされることを死ぬまでずっと我慢できなかったランボーのあの完全な放棄。そこには人を驚かすようなところは何もない，……何故作家が生涯の終りまで何か云うべきことをもっているなどといういわれがあろうか。彼が自分の中にもっていたものが表わされ，ひき渡されてしまったとき，何故黙ってしまわぬわけがあろうか。作家が衰退に至って尚作家としてとゞまるべきだという我々が作り上げているこの観念の中にこそ不合理はありはしないか。」[25]要するに作家は一生涯作家としてとゞまるべき何の理由ももっていないことをモーリャックは主張しているのである。ここにおいてモーリャックにとって創作活動とは何か，つまり文学とは何かが明確な姿をあらわしてきているのが分る。要するに，文学とは自己の真実を追求する真しな営みではあるが，しかし，それはあくまでも自己を発見するに至るまでの営みであって,決してそこにとゞまり続けて営まれるべきものではなく，自己の真実を把握しそれを引き渡し終えた者にとってはもはや必要のない営みであるといえる。云いかえれば文学の世界とは，真実の人生に至るまでの過渡的世界に他ならなくそれは一生そこにとゞまるべきいわゆる人生の目的たる世界ではあり得ないということである。自己の真実を知るためのいわば人生の目的を探すための世界でありこそすれ，文学それ自体は決して人生の目的たり得ないということである。従って,真の在り方追求という

文学の意義を逸脱し美の世界の構築のみに陶酔し，或いは，一度自己を引き渡してしまったのちも無用にしゃべり続けて，あたかも文学を人生の目的としている文学者の在り方をモーリャックが強く批判する根拠がここにあるのである。モーリャックは，「私に吐気を催させるのは文学である。あなた方が文学とよんでいるものである。文学風俗である。」[26]とはっきりと彼らに嫌悪を表明している。要するにモーリャックにとって文学とは作者がそれぞれの自己の真実を完全に把握し得るに至るまでの営みであってその営みが終った時文学はもはやモーリャックにとって無縁なものなのである。

かくて我々は，モーリャックが「*L'Agneau*は私が書いたもっとも真実な書物である。」[27]と自負し得た小説，*L'Agneau*を書き上げた後，筆を折り，創作活動を放棄してしまったことが，ここに納得することができるのである。つまり彼はこれを書き上げたことによって，遂に自ら発見した自己のすべてを引き渡してしまうことができたのであり，もはや語るべき何ものも無く彼は文学者であることの存在理由をもはや無くしてしまったからに他ならないのである。

小説 *L'Agneau* は，「モーリャックが小説の中で自分の個人的信条をこれほど明白に表明したことはなかった。」[28]と指摘されているように，ここには彼が真に把握し得たイエスの受難と死の意味が全体の見事な構成とすばらしい手法によって，作者から完全に独立した一つの世界の中で明白に語られている。例えば，主人公が自ら背負った木材の重みにもがき苦しみ倒れながらそのとき本当のカルバリオの丘の上で起った出来事を実感する次のような場面から我々は，モーリャックのとらえたイエスの真実が迫力をもって我々に迫ってくるのを感じるのである。「彼の肉体が引きさかれた今，この夜，彼は冷たい湿った夜の中で，今まで自分がその意味を悟ったと信じこみ人にも語りつゞけてきた十字架が突然今，彼がかつて識ったことのない姿で彼の前に立ち現われたのを見出した。十字架，それは彼が今まで信じてきたように拒絶された愛とか，うずくような精神のもだえとか，謙譲とか屈辱とかそういうものではなかった。それは今この瞬間，彼の足の皮をはいでいるこの土，この石の痛み，木でおしつぶされせめさいなまれているこの肩の苦痛そのものであった。彼はおそろしい筋肉の緊張の中で，歩を運びながら，彼の前にやせた背中が見えたと思った。激しい息づかい，上下する横腹，背骨，むち打たれて紫色に張れあがった無数の筋，をはっきり見ることができた。それはすべての時代の奴隷，永遠の奴隷であった。」[29]このように彼のとらえたイエスの十字架の意味が，見事に一つの世界となり得て，我々の眼前に展開されている。ここに呈示されているものこそモーリャックが把握した彼の真実そのもの，そしてそれが彼のすべてなのである。彼はこの小説によって彼のすべてを我々に引き渡すことができたのである。かつて彼の小説は，暗く悲惨な世界ばかりであったが，その時モーリャックは自己の真実を把握し得ず，従って，自己の姿をどうしても客体化し得ず作品から作品へといたずらに彷徨するしかなかったのであろう。勿論我々もそれらの作品では彼の真実をつかみかねるもどかしさしか感じようがなかったが，今や，この小説にお

いて我々は彼のすべてが我々に引き渡されてしまったことを感じずにはいられない。モーリャックはこうして「もはや小説が私をとらえることがなくなった」[30]と広言し，何の未練もなく文学の世界を後にするのである。

以上，我々は彼の文学観をはっきりと認識することができ，そして彼が文学を放棄するに至った意味を十分な納得をもって理解することができたと思う。要するに文学とはモーリャックにとって自己の真実を求めてそれを発見してゆくいわば過渡的世界のものであって，人生の目的たり得る世界ではなかった故に，一度自己の真実を把握し得たモーリャックにとってもはやそれは関心のない世界となったということである。つまり彼が文学を放棄したのは，文学の価値そのものの否定というようなことではなく，彼がすでに，彼にとっては過渡的段階にすぎない文学そのものの世界を卒業し得たということを意味していることに他ならない。更に云うなら，彼が文学を放棄したのは，彼が遂に真の人生を発見したということを意味していると云えるのである。

以上のように，モーリャックの文学放棄は決して創作活動の価値そのものの否定を意味するものではなく，たゞ彼が文学的次元を脱したからに他ならないことが明らかとなったのであるが，ところでこのことについて，フィリップ・ストラトフォードがその著 *Faith and Fiction* で，小説家と engagement の問題にふれ「モーリャックが *Galigaï* の終りで示している自省，小説の限界についての辛辣な結論，とくに自らの小説の無益さ，無効性を糾弾する姿勢はその誠実さのあらわれである。」[31]とのべてモーリャック自身が自らの小説の無益さ無効性を糾弾していることを指摘し，彼の小説放棄が，小説そのものの無効性の自覚に依るものであることを示唆しているがこの場合の小説の無効性とは，真理の証明の手段としての無効性，或いは行動の手段としての無効性ということであって，モーリャックが小説そのものを無益なものとして否定するものでないことは，以上でも明らかになっている通りであり，彼の小説放棄はあくまで小説の次元から脱したものとして考えるのが妥当であると思われる。

さて以上の考察から彼が創作に関心を失い創作活動を放棄したことは，彼が遂に自己の真実を探り当て，もはや文学的次元にとゞまる必要性が解除したことを意味するものに他ならないことが明らかになったわけであるが，こうして彼の文学放棄の意味が明らかにされた今，我々はここに，彼の engagement の意義がおのずと明確になったことが分る。つまり彼の engagement は，彼が今まで探り，そして遂に探りあてた彼の真実にもとづく，人生の真の在り方そのものに他ならないということである。要するに engagement はモーリャックにおいては人間の真実とは何かというこれまでの問いに対する答えとしての意義をもったものであるということが分る。文学や芸術や科学研究などその他様々な人間の営みとは全くちがい，人生の真の目的ともいうべき価値をもったものなのである。文学らはそれなりのそれぞれの価値はあるものの結局は極言すればパスカルのいわゆる divertisse-

ment にすぎず，人間の生に真の充足を与えるものではない。我々の根源的渇きを癒し得るものではない。モーリャックにおいて，engagement はそれらとは同列にあるものではなく人間にとって真の根本的在り方としての意義を有するものである。つまり，神の国とその正義への渇きがこの地上においていやされることを求めることこそ，人間が人生において真に為すべきことであって，それ以外の何ものも人間にとってより重要なものはあり得ない。何故なら正義への渇きがいやされてこそ人間は真に生の充足を得ることができ，真にその存在を全うすることができるからである。肉体をむち打たれ血をしたたらせているいかなる奴隷も存在しない世界，あらゆる人の尊厳が決して侵されることのない世界，その世界が実現してこそ人はいかなる懐疑も渇きもおぼえることなく生を充足し得るのである。だからこそ，その実現を求めて，不正と対決し人間の愚鈍さを曝き人間の精神の怠惰を糾弾して，尊厳なる人間性を覚醒せしめんと現実に行動することがモーリャックにおいて唯一絶対の真なる人生の在り方といえるのである。モーリャックの engagement はまさにこのことを意味しているのである。したがって，モーリャックの engagement はこのように遂に彼が確信し得た人生の決論とも云うべき意味をもっている故にこそ，つまり，真理への絶対的確信にもとづいたものである故にこそ，彼の行動は，無神論的ヒューマニスト達の懐疑と不安のいり混ったそれとは異なり，いささかの迷いもなく何を恐れることも無い徹底的な激しさで貫ぬかれているのであり，又，そのペンは，真理への絶対的確信からほとばしるものであるが故にこそ，敵を射抜いて余りある鋭い力を有しているのであることが分る。

さてこうして，モーリャックの engagement の意義が明らかとなりモーリャックは結局は遂に人生の真実を把握して文学世界を飛翔してしまったものであることを知った今，我我はおのずと彼の文学の本質もここにはっきりと把握され得ることが分る。要するに彼が文学を飛翔したという事実こそ彼の本質のすべてを規定するものであり，この事実を見逃がしては真のモーリャック理解はあり得ないと思う。

注

(1) F.Mauriac ; *Œuvres Complètes* (Fayard) Tome XI, Préface

(2) F.Mauriac ; *Bloc-Notes* (Flammarion) p. 12

(3) F.Mauriac ; *Nouveaux Mémoires Intérieurs,* (Flammarion) p.186

(4) F.Mauriac ; *Bloc-Notes,* p.361

(5) *Ibid.* p.68

(6) Philip Stratford ; *Faith and Fiction* (University of Notre Dame Press) p.243

(7) F.Mauriac ; *Bloc-Notes,* p.243

(8) *Ibid.* p.173

(9) *Ibid.* p.173

(10) Philip Stratford ; *Faith and Fiction,* p.289

(11) Jacques Robichon ; *Francois Mauriac,* (Editions Universitaires) p.40

(12) F.Mauriac ;*Œuvres Complètes* Tome Ⅶ. *Dieu et Mammon,* p.304

(13) *Ibid.* p.290

(14) *Ibid.* p.279

(15) F.Mauriac ;*Œuvres Complètes* Tome Ⅷ. *Le Romanccèr et Ses Personnages,* p.299

(16) *Ibid.* p.303

(17) *Ibid.* p.303

(18) F.Mauriac ;*Œuvres Complètes* Tome Ⅶ. *Dieu et Mammon.* p.308

(19) F.Mauriac ;*Œuvres Complètes* Tome Ⅷ. *Le Romancier et ses Personnages,* p.302

(20) *Ibid.* p.303

(21) F.Mauriac ; *Bloc-Notes,* p.358

(22) F.Mauriac ;*Œuvres Complètes,* Tome Ⅷ. *Le Romancier et ses Personnages,* p.308

(23) Philip Stratford ; *Faith and Fiction,* p.305

(24) F.Mauriac ;*Œuvres Complètes.* Tome Ⅷ. *Le Romancier et ses Personnages,* p.297

(25) F.Mauriac ; *Bloc-Notes,* p.124

(26) *Ibid.* p.135

(27) *Ibid.* p.273

(28) Philip Stratford ; *Faith and Fiction,* p.288

(29) F.Mauriac ;*Œuvres Complètes* Tome Ⅶ. p.271

(30) Philip Stratford ; *Faith and Fiction,* p.289

(31) *Ibid.* p.327

(旧姓　川崎　D．43　梅花女子大学講師)